

英語教員になるために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/296

英語教員になるために

上 野 桂 子

はじめに

現在、私は青森県立の工業高校で教鞭を執っています。大学卒業後、臨時講師を含めて30数年、英語教師として過ごしてきました。このたび、「英文学科での学びが教育の現場でどのような役割を果たしたか」について執筆依頼をいただきましたが、大学生時代があまりにも遠い記憶になってしまい、それほど多くのことを語れませんが、自分の幼い頃からの思い出を含めて、英語教員としての自分に影響を与えた学生時代の英語の学びについて書いてみたいと思います。

英語との出会い

私が初めて、「英語」を意識したのは、小学校4年生の時です。年の離れた兄が、三沢米軍基地の兵隊さんを家に連れてきました。その人とは趣味を通じて友達になっただけで、昭和40年代のこと、アメリカがまだベトナムと戦争をしており、彼もいつ戦場に行くかわからないと兄が言うので、私は一言でも話ができればいいなと思いましたが、恥ずかしかったので、声をかけることができませんでした。このことがきっかけで、英語に興味を持つようになり、『絵で学ぶ僕らの英語』という本を友達とそれぞれ購入し、カタカナのルビを読みながら二人で英会話をしている気分に浸りました。その後、中学生の時にはテレビにかじりついて、セサミストリートを見ながら発音を真似る、高校時代にはラジオ英会話に耳を傾ける、夏休みには教会の主催する行事に参加して、三沢米軍基地のホストファミリー宅に宿泊し、基地内の生活を体験するなど、徐々に自分の中に英語を学ぶ道筋ができてきました。私は学校生活がとても好きだったので、将来は教員になりたいと思い、先生方に相談したところ、英語で定評があると聞いて、東北学院大学を受験することに決めました。

東北学院での学び

私が入学した年度は、英文学科の募集定員が300名で、グループ所属は5グループ、担任は横沢四郎先生でした。横沢先生からは米文学について講義していただきました。講義中、先生はときどき質問を投げかけたり、意見を求めた

りするのですが、反応がないと「あのね、君たちは…」と言う調子で、ご自身の若い頃のお話をされながら、私たちに若者らしくあるよう説教されたことがありました。しかし私は、その話に興味をひかれ、先生の別な一面を知ることができてうれしい気持ちにさえなりました。服装が若々しく、お茶目な雰囲気の漂う先生でした。一度、同じグループのメンバー数人で先生のお宅にお邪魔したことがあります。先生は和犬を飼っており、にこにこしながら和犬の気質について話してくれました。後で気がついたのですが、講義中、ある英文の描写を説明する時に、「犬がね、よくこうやるでしょ」とジェスチャー混じりで、説明されたのを思い出し、先生の愛犬と結びつきました。犬好きの私には、この説明がずっと記憶に残っています。

英語を学ぶ上で、とても刺激になったのは外国の先生方担当の科目です。入学してすぐに英会話を担当していただいたのはカール・シュワイツァー先生でした。日本語が堪能で、よく日本語を話されていましたが、教室を回りながら、学生ひとりひとりに英語の発音をさせました。自分の番になるときに少し緊張したのを思い出します。時間はかかるかもしれませんが、生徒個々に指導する方式は今の自分の授業のやり方に生きています。ほんのわずかな時間かもしれませんが、1時間の授業の中で必ず1回発表する場があることは、とても大切なことだと思います。当時、「ビューティフルサンデー」という歌がはやっており、シュワイツァー先生が突然歌い出し、私たちはふっと笑ったことがありました。真似たわけではありませんが、私も授業中、‘row’という単語が出てきたときに、“Row, row, row your boat…”と歌い始めたら、生徒が一瞬驚きの表情を見せて、笑い出したことがあります。私としては何の気なしに、とっさに起こした行動でした。その後の生徒の反応が、よかったと感じています。

英会話の先生と言えば、もう一人、ジェイムズ・ヴァーダマン先生にお世話になりました。ノーマルスピードのアメリカン英語で指導していただきました。慣れるまではところどころ、わからないこともありましたが、「習うより、慣れよ」とはよく言ったもので、次第にわかるようになりました。英単語を英語で説明すること、ペア活動、グループ討論など、実践的な英語の学習をしていただきました。先生はときどき、日本人の誤った英語の使い方を指摘してくださり、そのつど納得したものです。また、ときにはご自身の日本語学習に関すること、たとえば、日本の新聞を読むことや「サザエさん」を読んで日本の生活習慣、文化を知る材料としていることなどを話されました。母国語でない言語を学ぶには多くの時間を費やします。特に日本語を学ぶにはひらがな、カタ

カナ、漢字を覚えなければならないし、私たち日本人が英語を学ぶよりもっと大変かもしれないと思い、学習不足の自分を反省しました。ヴァーダマン先生とは大学卒業後、青森県の高専外国語部会研究大会の時に講演をしていただく機会があり、懐かしい再会を果たし、それぞれの近況について語り合うことができました。今でも、某大学の教授としてご活躍されていることをうれしく思います。

英語の学習で一番英語のシャワーを浴びたという印象のある科目は、音声学です。特に、LL教室でノーマルスピードの英語を聞いているうちに耳が慣れ、ある程度の早さでも内容をつかめるようになりました。時折、シャドウイングをしながら、リスニングに集中しました。講義においては母音や子音の解説のほか、全員で実際に発音することにより、実践的に身につけることができました。児玉省三先生、吉川清隆先生、平河内健治先生いずれも、とてもきれいな発音の英語を聞かせてくださいました。私は日頃生徒たちに、発音できない単語は意味がわからない、声に出して文を読むことが大事だと言っています。英語が苦手な生徒でも、発音が褒められ、英文を読めるようになると、得意げな表情を見せるようになります。何よりも授業そのものに活気がみなぎります。特に新指導要領では、コミュニケーション英語に焦点を当てているので、「聞く・話す」能力を身につけさせるために、大学で学んだことが、自分の英語の指導にとっても役に立っています。

他にも英語に関する科目を学びましたが、東北学院では英語だけでなく、キリスト教学や礼拝などを通して教育に携わる者として必要な資質を身につけられたと思います。幼い頃から憧れにも似た気持ちで英語を学んで来て、今度は、自分の思いを生徒たちに伝えられる立場になれたことをとても幸せだと思っています。英語教師としての素養を育んでいただいた東北学院大学の教育に感謝し、これからも多くの教育者を輩出されることを祈り、ここに締めくくりたいと思います。